

Fate/stay night イリヤルート

天才と秀才

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

聖杯戦争。

それは7人のマスターとサーヴァントが聖杯を手に取る為に行う殺し合い。

その最中、一人の少年がマスターである白い少女と出会う。

そして、それはこれから少年を巻き込む凄惨な聖杯戦争の始まりでもあった。

目 次

プロローグ 聖杯戦争1日目 早い始まり

聖杯戦争1日目～2日目 召喚

聖杯戦争2日目

20 10 1

# プロローグ 聖杯戦争1日目 早い始まり

西暦2027年 1月2日 夜 学園都市

学園都市。

“外”と20～30年離れた科学力を持つ近代都市にして、科学サイドの総本山。

18年前の第三次世界大戦、イギリス決戦を得て、立場の強化と世代交代を行い、現在は文字通りの世界の中心の都市。

その学園都市内にある居住施設。

そこでは二人の男女が月を見ながら、縁側に座っていた。

「・・・」

「・・・」

二人は言葉を発しない。

ただただ月を見上げている。

やがて、男の方が口を開いた。

「瑞鶴・・・」

「はい」

男の発した名に、女は答える。

瑞鶴。

それは男が女と共にこの街にやつて来てから、一度として言うことの無かつた名前。

そして、女が瑞希という名前に改名した時に捨てた名前。それを今ここで使う意味を女は悟っていた。

「僕はね、小さい頃、ヒーローに憧れていたんだ」

「うん」

「——でもね。それは叶わなかつた。こんなボロボロな体になつてもね」

男はそう言いながら、自らの体を見る。

もう長くはない。

半年ほど前、確かにそう医者に言われた。

だが、男に動搖はなかつた。

何となく、何時かはこうなるだろうと思つていたのかもしれない。

「それで、僕は一人の少女を守ろうとした。でも、駄目だつた。そして、それを取り戻そうとして更に僕を好きだと言つてくれた少女を失つた」

男は目を瞑りながら思い出す。

この世界に来てから、初めての希望となり、婚約者となつた一人の少女。

そして、その少女を取り戻そと、別世界での戦いに望んだ際に出会つた一人の銀髪褐色の少女。

前者は男との間に二人の子供を残して死に、後者は自分を救う形で死んだ。

共に、良くも悪くも、男の心に楔を打ち込み、男のその後の人生に大きな影響を与えた少女だ。

「そして・・・君に出会つた」

そして、また現在の妻であるこの女もそだつた。

「でも・・・結局、僕は誰一人救えなかつたのかもしれない。こうして、

君を置いていこうとしているんだから」

男はそう言いながら、涙を流す。

それは悔し涙だった。

男は自分の選んだ道に後悔はしていない。

…………していのだが、既に死期を悟っている男にとつて、隣に居る女性や子供を置き去りにしてしまう事は最大の心残りだった。

「――ううん、そんな事はないよ」

だが、女はそれを否定しつつ、のび太の頭を抱き抱える。

「瑞鶴？」

「私はね。ううん、私たちにとつてはね。あなたは紛れもないヒーローなのよ。提督さん、いや、あなたが居たから私はこうして居られる。幸せで居られるんだよ？だからさ、後は私に任せて。あなたの子供達はきちんと私が全員、育てて見せるから」

「――

男はその言葉に救われたような顔をする。

そして――

「――ありがとう」

その言葉を最期に、男は逝つた。

野比のび太 享年28歳。

◇西暦2004年 2月1日 遠坂邸 未明

冬木市の遠坂邸。

それはこの冬木市のセカンドオーナー管理<sup>セカンドオーナー</sup>者、遠坂凜を家主とする邸宅である。

そして、遠坂とは、200年以上前から続く聖杯戦争の御三家の一  
角でもあり、また此度の第5次聖杯戦争でも優先参加権を与えられて  
いる家系でもある。

御三家。

それは分かりやすく言えば、聖杯戦争のシステムを造り上げた存在  
だ。

それ故、この極東の聖杯戦争の中で優先参加権を保持している。  
つまり、参加する7組のマスターとサーヴァントの内、3組は聖杯  
戦争のからくり上、枠が決まっていたのだ。

そして、今、遠坂6代目当主はサーヴァントを召喚しようと、儀式  
の準備を行つていた。

「よし、これで準備は完了、と。ふう、なんだかんだで私が最後になつ  
てしまつたわね。まあ、セイバーが残つているから良いか」

少女——遠坂凜はそう言いながら、魔法陣の中へと入る。

(聖杯戦争。既に六騎が召喚され、残つてているクラスはセイバーだけ  
だから、私がセイバーを召喚するのは確実なんだけど、どんな英靈が  
召喚されるかは分からぬのよね)

そう、既に聖杯戦争のサーヴァント7騎の内、6騎は既に召喚され  
ており、あと1騎揃えば、監督役である言峰綺礼の手によつて、聖杯

戦争の開幕が告げられる手筈となつていて。

つまり、今ここで凜がサーヴァントを召喚すれば、その瞬間に聖杯戦争は始まるという訳である。

この時点で事実上、完全に出遅れているのだが、凜はその事をさして気にしてはいない。

何故なら、残る1騎であるセイバーは、正に凜が狙っていた最優のサーヴァントなのだから。

最優。

文字通り、もつとも優れているという意味であるが、何故セイバーのクラスがそう言われるのかと言えば、幾つか理由がある。

まず剣の英靈というのは知名度が高い英靈が多く、知名度による能力アップが期待できること。

次にセイバーのクラスに選ばれるには剣の英靈である事に加えて、一定の能力値（そそこそこ高い設定）が必要だということ。

つまり、セイバーのサーヴァントを召喚した時点での高い能力値を持つたサーヴァントを得られることが確定していると言えること。

最後に剣の英靈というのは騎士道精神あふれた者が多く、比較的マスターの意向に従つてくれるので、マスターとしてもやりやすいということ。

以上がセイバーが最優と言われる由縁である。

・・・が、実を言うと、幾つか弊害は存在する。

まず騎士道精神に溢れているが故に、融通が効かず、敵味方問わず

に非道な行いが許せないということ。

もう1つが、同じく騎士道精神に溢れているが故に、相手の騎士道を必要以上に信じ過ぎてしまう弊害があるということだ。

実際、第4次聖杯戦争では、共闘したランサーに対し、騎士道精神を信じる形で自らのマスターの元にランサーを行かせてしまうという失態をやらかしている。

だが、当然そんな事を凜は知らないし、仮に知っていたとしても、そもそも他のサーヴァントは召喚され、選択の余地がない以上、セイバーを召喚するしかない。

閑話休題。

凜は気分の高揚と少々の不安を同時に覚えながら、サーヴァントを召喚する為の呪文を唱えた。

「素に銀と鉄。

礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。

四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。

閉じよ（みたせ）。

閉じよ（みたせ）。

閉じよ（みたせ）。

閉じよ（みたせ）。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する

——告げる（A <sub>セッ</sub>n f a n g）。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ  
誓いを此処に。

我是常世総ての善と成る者。

我是常世総ての惡を敷く者。

汝三大の言靈を纏う七天。

抑止の輪より來たれ。

天秤の守り手よ——！

こうして、最後のサーヴァントである金髪碧眼の少女——セイバー

は召喚された。

そして、この時をもつて、"本来の歴史より1日早い" 第5次聖杯戦争が始まった。

「まつ、良いか。気にすることでもないんだろ」

そう思い、思考を打ち切りながら再び帰路に着こうとする。  
だが、その前に自分の裾を引っ張る存在に気づいた。

◇同日 深夜 冬木市

衛宮士郎は間桐邸からの帰路に着きながら、先程会った老人——間桐臘硯の言つた意味を考える。

(アインツベルンの娘は壮健か?、か。いつたい、なんのことだ?)

衛宮士郎にはその意味が分からなかつた。

(アインツベルンつて、どう考えても外国人の名前だよな。でも、俺はそんな事知らないし、なんで、そんな事を聞いたんだろうな)

色々考えてみたが、衛宮士郎は見当もつかない。

「ん？誰だ？」

士郎はそちらを振り向いた。  
すると――

「こんばんわ。戦争はもう始まっているわ。早く召喚しないと死ん  
じやうよ？お兄ちゃん」

そこには白い妖精が佇んでいた。

# 聖杯戦争1日目～2日目 召喚

◇西暦2004年 2月1日 夜 冬木市

「え、と、君は？」

その姿に見惚れながら、士郎は少女に名前を尋ねた。

そして、少女は体をクルリと回し、スカートを摘まみながらそれに答える。

何処か上品なその動作は、少女の品格の良さを感じさせた。

「私の名前はイリヤスフイール＝フォン＝アインツベルンだよ。お兄ちゃん」

「アインツベルン？」

その名に思わず聞き返してしまった。

何故なら、つい先程聞いた名前だからだ。

「どうかした？」

「いや、その・・・アインツベルンっていうのは何なのかなって思つてな。俺の親戚か何かか？」

そう言う士郎の言葉に、少女はルビーのような紅玉の瞳を見開かせた。

「えっ、知らないの？ キリツグから聞いてないの？」

「キリツグって、俺の親父か？ 何も聞いてないけど。ああ、もしかして親父の方の親戚なのか？」

士郎は切嗣の名前を知っていた事から、父方の親戚であると当たりをつけた。

外国人の親戚が居るとは、士郎も初耳であつたのだが、よくよく考えれば、切嗣は外国にしようつちゅう行つていたし、その中で親戚に会いに行つていたとしても、不思議ではない。

士郎はそう思つたのだ。

半分ほど当たつているこの推測であつたが、少女はその言葉に一瞬だけ悲しそうな顔をして、すぐに表情を戻した。

「名前・・・」

「えつ？」

「名前、教えて」

「あつ、ああ。俺の名前は衛宮士郎だ」

「エミヤシロ？不思議な発音するんだね？」

「違う！それだと『笑み社』だ。衛宮が名字なんだ。覚えにくかつたら、士郎とだけ覚えてくれ」

「――」

その言葉に、少女は一旦黙り込んだ。

(しまつた。強く言い過ぎたか?)

名前を間違えられたとはいえ、(見た目が)小さい子供相手に少し言い過ぎたかと士郎は少し後悔したが、発した言葉はもう戻らない。

だが、少女に気にした様子は無いようだつた。

「・・・シロウ。シロウかあ・・・うん、気に入つたわ。単純だけど、響きが綺麗だし」

少女はそう言いながら、太陽のような笑みを士郎に向ける。

「名前、教えてくれてありがとう、シロウ」

「あ、ああ。どういたしまして」

士郎はドギマギしながら答える。

外国人という事もあり、その笑顔は見た目が小学生くらいなのにも関わらず、さまになつていてる。

「ふふっ・・・またね、シロウ」

そう言つて少女は去つていつた。

「何だつたんだ?」

士郎はそう言いながら、少女の去つた方角を見つめていた。

◇西暦2004年 2月2日 冬木市 夜 穂原郡学園

冬木市に存在する穂原郡学園。

冬木市ではそこそこ名の通つた私立学園であり、かの御三家の内の2角——間桐と遠坂が通う学園もある。

そして、今そこでは1つの戦いが起こつていた。

ガキン、ガキン、パキッ

「トレイス・オン  
投影開始」

青い騎士と赤い戦士の戦い。

それは正に、人を越えていた。

そして、とある世界ならばこう言うことだろう。

『まるで、聖人同士の戦いだ』、と。

しかし、現実はサーヴァントの能力はよつぱどの英靈格を持つサー  
ヴァントで無い限り、聖人を下回る。

だが、そう錯覚するほど、目の前の戦いは人間からしてみれば圧倒的だつた。

ガキン、ガキン、パキッ

「トレイス・オン  
投影開始」

また1つ、赤い戦士の持つ宝具が碎けるが、すぐにまた新しい剣が発生する。

何時までも膠着状態のまま進まない戦いに、遂に青の騎士が焦れた。

「剣を幾つも持つなど・・・貴様、何処の英靈だ！」

「生憎、名乗る程の名は持ち合わせていなくてな。それには答えられない」

「ならば、斬るだけだ！」

ガキン！

「うつ！」

青の少女騎士——セイバーに淡々とそう応えた赤の戦士——アーチャーであったが、実のところかなり焦っていた。

一見、互角に見えるこの戦いであるが、実際に戦っているアーチャーからしてみれば、それは幻想でしかない。

何故なら、元々の技量の差に加えて、そもそもアーチャーははある事情から思い切って戦えていないからだ。

それではセイバーの猛攻を防ぎきる事は到底できないし、今持っているのも、相当な無理をしているからなのだ。

(そろそろ限界か。偵察も済んだことだし、撤退するか)

そう、マスターから頼まれた行動は偵察。

それが終わり、本来の実力が出せない以上、撤退するという選択肢が正しい。

が、目の前のセイバーがそれを見逃してくれるかと言えば、それは当然のことながら『NO』だ。

勝てそうな相手を見逃す程、セイバーも馬鹿ではない。

故に、アーチャーはどうにか撤退する為に、セイバーから隙を造ろうとする。

だが、その行動に移る直前——

パキッ

その物音は鳴つた。

#### ◇同時刻

士郎は友人であつた間桐慎二から託された弓道室の清掃を終えて帰路に着こうとしたが、その帰りに彼は見てしまった。

サーヴァント同士の戦いを。

そして、誤つて物音を立ててしまつた時、彼は一目散に逃げ出した。校舎の中なら安全だろうと、士郎はそちらへ逃げ出した。が、これは言うまでもなく誤りである。

何故なら、校舎の中では逃げ場は殆ど無いのだから。

そして、もう1つの誤りは、彼が英靈というものを見くびっていたことだ。

まあ、そもそもサーヴァントというものを知らないので、そう考えるのも仕方の無い事ではあつたのだが、現実ではそのような誤りは1つ足りりとて許されない。

故に――

「やはり貴様か」

士郎はアーチャーに追い詰められた。

「まあ、これで私の宿願も果たせる。大人しく、死ね」

そして、アーチャーは片手で剣を投影すると士郎の心臓に向けて刺した。

◇同日 深夜 衛宮邸

アーチャーに刺され、確かに死亡した士郎であつたが、『何故か』生き返る事が出来ていた。

そして、傍に有つた赤い宝石を拾うと、その場を片付け、衛宮邸へと帰つた。

だが、士郎は現在、再び死の臭いを敏感に感じ取つていた。

カラーン、カラーン、カラーン

家に張られた警告用の結界が警告を鳴らす。

そして、家主である士郎は、直感的にあの男が再び殺しに来たのだと思い、迎撃の準備を行つた。

だが |

「その程度で勝てると思ったのか？未熟者」

ドカツ！ドツシャアアアン

迎撃したもの、全く歯が立たずに蹴り飛ばされ、土蔵へと放り込まれた。

当然と言えば、当然だった。

士郎は魔術を使えるものの、その魔術は素人の域を出ない代物であり、それですらかなり成功率の低いものを、今回、偶然成功させた有り様だったのだ。

対して、男は英靈。

その身体能力や様々な能力は、通常の魔術師など、到底相手にならず、この時代で一流と言われる魔術師ですら、生存率はかなり低いと言われている。

そんな相手と戦つたら、どうなるか？

勝敗など戦う前から決まっていた事だつた。

しかし、アーチャーもこの時、致命的な誤りを行つていた。

それは士郎を土蔵に放り込んでしまつた事だつた。

何故それが誤りかと言えば、本来の歴史では、ここに引かれた魔法陣からセイバーを召喚するからだ。

アーチャーも磨耗した記憶の中で、それを覚えていたものの、彼の心には焦りなどなかつた。

「セイバーが召喚されたという事は、お前には令呪が宿らなかつたという事だ。まあ、お前を殺せば良い私には関係ないがな」

アーチャーは剣を携えながら、士郎にゆっくりと近づいていく。  
そう、彼の懸念であつたセイバーは既に凛によつて召喚されていたのだ。

ついでに言えば、他のクラスが出てくることもあり得ない。

昨日召喚されたセイバーで最後の7騎が揃つてしまつたからだ。  
故に、衛宮士郎が英靈を召喚することはあり得ない。  
そんな確信を抱いていた。

が、今この時に限つて言えば、その確信は慢心となつた。  
何故なら――

ピカツ

一条の赤い光が発せられと共に、一体のサーヴァントが現れたから  
だ。

そして、それは――

「サーヴァント、ガンナー。召喚に従い、参上した。問おう――

あなたが僕のマスターか?』

存在しない筈の8体目のサーヴァントだった。

## 聖杯戦争2日目

西暦2004年 2月2日 冬木市

「なんだと!?」

この8体目のサーヴァントの召喚に一番驚いたのは、召喚した本人ではなく、襲撃者であるアーチャーだった。

当然だろう。

出てくる筈がないと思っていたサーヴァントが今正に出てきたのだから。

しかし、何時までも呆けている訳にもいかない。

一旦、距離を取つて、態勢を整えた。

「……なるほど、サーヴァントに襲われている最中に召喚されたという訳か」

ガンナーと呼ばれたそのサーヴァントは、アーチャーの方をチラリと見てそう判断すると、膝の部分に装着されていたナイフを引き抜き、構える。

「さて、行くよ！」

ダツ！

ガンナーはそう言いながら、アーチャーに向けて走り出した。

◇

アーチャーはガンナーが近づいてくるのを確認し、素早く双剣を構えた。

そして、ガンナーが手始めに左手で拳を繰り出してきたので、片方の剣でそれを切り裂こうとする。

だが――

パキン！ドコオ！

拳はその剣を碎き、そのままアーチャーの鳩尾へと命中した。

「ぐおっ」

流石のアーチャーもその攻撃に呻き声を発してしまう。

だが、彼も腐つても英靈。

直ぐ様態勢を立て直そうとしたが、ガンナーの攻撃の方が早く、アーチャーが気づいた時には、ガンナーの右手の逆手で握り締められたナイフが目の前に迫っていた。

「うつ」

シユツ、ブシユ

アーチャーは頬に若干の傷を受けられながらも、なんとかかわす事に成功した。

しかし、その次の瞬間にアーチャーの目の前からガンナーが消え

た。

「なつ。何処——」

ドコオ！

それに動搖するアーチャーに、背後からガンナーの回し蹴りが炸裂した。

◇同時刻

ガンナーとアーチャー（と言うより、一方的な蹂躪）を行っていた頃、その戦いの場である衛宮邸に二人の人物が向かっていた。

「抜かつたわ！」

その内の一人、遠坂凜は歯噛みしながら、自分の迂闊さを睨つた。  
数時間前。

10年間貯めた魔力の宝石を使い、士郎を治療した凜であつたが、その後、宝石を置いてそのまま立ち去ってしまったのだ。

しかし、後でセイバーに指摘される形で、士郎が再びアーチャーに狙われるであろう事に気づき、こうして衛宮邸に向かっている訳だった。

「リン、落ち着いてください」

イライラしている様子の凛をセイバーは宥めに掛かる。

そして、その言葉に、凛は少しばかり冷静さを取り戻した。

「……ごめんね、セイバー。少し冷静じゃなかつたわ」

「いえ、構いません」

セイバーはそう言つて警戒しながら、衛宮邸までの道のりを進んでいく。

もう暫く歩けば衛宮邸。

そこにはおそらくアーチャーが居ることは確実であり、出くわすことになれば戦闘になることはまず間違いない。

なので、ここでマスターに冷静になつて貰わなくてはセイバーとしても困るのだ。

もつとも、二人とも、土郎については既に手遅れであるとは薄々思つてはいた。

が、凛としても簡単には諦められない事情があり、セイバーの方もマスターが行くと言つてはいる以上、それに付き合うしかない。

故に、最低限の義理は果たそうと、二人は衛宮邸を目指していた。



背後からの回し蹴りを喰らい、吹き飛ばされるアーチャーであつたが、再び態勢を立て直そうと試みる。

「ふつ！」

ガンナーの足止めの為に持っていた片方の剣をガンナーに向けて投げる。

更に続けて剣を投影し、再びガンナーに向かつて投げ付ける。

合計で数本の矛先がガンナーに向かう。

それは人間ならばひとたまりもなく突き刺さるだろうが、サーヴァントであるガンナーであれば、持っているナイフで弾いてしまうだろう。

だが、それで良い。

元々、アーチャーの目論みはガンナーの攻撃をまず止める事だったのだから。

そして、その剣がガンナーの目前まで来た瞬間、ガンナーの姿がその場から消えた。

「ツ!？」

アーチャーは目の前の光景に驚き、目を大きく見開いた。

それはガンナーが突如として消えたからではない。

ガンナーが自分のすぐ近くに突如として現れたからだ。

「な、に?」

それがアーチャーの最期の言葉だつた。

ザシユ

その無防備に近いアーチャーの態勢にガンナーがナイフで喉を深く切り裂いたのだ。

当然、首となると靈核が存在するので、それが破壊されればサー・ヴァントは現界出来なくなる。

その為、着地する頃にはその首の血を噴出させながら、光の粒子となつて消えた。

こうして、アーチャーは過去の自分に復讐を果たすこともなく、呆気なく第5次聖杯戦争の舞台から脱落した。



アーチャーを始末し終えたガンナーは、その血に染まつたナイフを仕舞いつつ、戦いの場を覗いていた士郎に対し声を掛ける。

「もう出てきても大丈夫ですよ」

そう言うと、士郎は恐る恐るといった感じだが、ガンナーに近付いた。

「お前は一体何者なんだ？さつきの奴もそうだけど」

「ん？ サーヴァントですよ。クラスはエクストラクラスであるガンナーです」

「サーヴァント？ どういう意味だ？」

「えつ？ 知らないんですか？」

ここでガンナーはようやくマスターである士郎が困惑している理由が分かった。

(どうやつたかは知らないけど、自分を呼び出したのは本当に偶然なんだろうな)

ガンナーはそう思いながら、どう説明しようかと顎をしゃくった。  
聖杯戦争は小規模ながらも、秘密の舞台で行う本物の戦争だ。

そして、勝った者はかつて自分が参加した第6次聖杯戦争のように聖杯が汚染されていない限り、聖杯によつて願いは叶えられる。  
だからこそ、マスターもサーヴァントも相手を殺すことに躍起になるのだ。

しかし、そんな舞台に何も知らない人間を放り込んだらどうなるか？

・・・どう考へても、よくなるビジョンが浮かばない。

「はあ。分かりました。最初から説明を——」

します、と言おうとした時、ガンナーは気づいた。  
この屋敷に向かってくる2つの影を。

「・・・すいません。話は後で。マスターはここで待つていて下さい」

「あ、おい、ちょっと！」

マスターの返答を待たず、ガンナーは侵入者迎撃の為に駆け出した。

◇同時刻 衛宮邸周辺

最初にその接近に気づいたのはセイバーだった。

「!? リン、サーヴァントが接近しています!! 気を付けてください!!」

「ええ、分かつ——」

凛が言い終える前に、突如として空中からガンナーは現れる。

ドン、ドン

ガンナーはセイバーに向けて先制攻撃を行う。  
空気弾。

ガンナーの中で最速の攻撃技だ。

文字通り、空気を収束させた弾丸を銃（に模したモデルガン）から打ち出す技で、溜めのタイミングにもよるが、即席の攻撃でさえ、その弾丸の速度はマツハ10を越える。

そして、今回、打ち出した目標はセイバーの心臓と頭。

つまり、ガンナーはコロラード撃ちと呼ばれる攻撃技を繰り出したのだ。

並みのサーヴァントであれば、何がなんだか分からぬ内にやられていただろう。

しかし、セイバーは少し違つた。

直感A。

殆ど未来視の次元の芸当によつて、セイバーはどうにか反応できた。

しかし――

「グツ」  
　　

頭を狙つた銃弾はかわしたものの、心臓を狙つた銃弾はかわしきる事は出来ず、右胸に弾が命中し、穴を開ける。

「セイバー!! なめるな!」

崩れ落ちた自らのサーヴァントを心配しながらも、凛は宝石を使ってガンナーを迎撃とうとする。

が、ガンナーの行動の方が速かつた。

シュン

「なつ!」

先程のアーチャー戦のように、ガンナーは空間転移を使い、姿を消す。

凛はそれを見て、何がどうなつてゐるのか分からず、動搖してしまつた。

そして、再び現れたガンナーは、凛の背後に居た。

「しまつ——」

「動くな！」

凛の言葉は最後まで続かない。

何故なら、ガンナーは後ろから左手で凛の口を塞ぎ、右手で凛の首にナイフを突き付けているからだ。

「リン、貴様！」

それを見たセイバーが助けようとすると、体を負傷しているのに加えて、形成的にどう考えても向こうがナイフを凛の首に突き刺す方が早いので動けない。

「さて、君は……どのクラスだか分からぬけど、動かないでね」

「貴様、人質などと……英靈として恥ずかしいとは思わないのか!?」

「いや、そう言われても……僕だってサーヴァントだからマスターを護る義務が有るし。で、どうするの? 遠坂さん。サーヴァントを自決させれば命までは取らないけど?」

「……お断りよ。そんな提案には乗らないわ」

「リン!」

「そつか。じゃあ、さよなら」

そう言つてガンナーはナイフを凛に突き刺そうとする。

だが、正にその時――

「待つてくれ、ガンナー!」

マスターが家から飛び出してきた。

「えっ、ちよ、家に入つて来れと」

「こつちは状況が分からんのだ! まずは状況を説明してくれ!!」

「いや、今はそんな場合じゃ」

そう言つて、ガンナーは内心で頭を抱えるが、凜はその状況を見て、圧倒的不利な状況にも関わらず、不適な笑みを浮かべる。

「さつさと離してくれない? 少なくとも、マスターはそう望んでいるみたいだけど?」

「・・・」

ガンナーは一瞬だけ考え、セイバーの方をちらりと見ると、こう答えた。

「・・分かりました。じゃあ、サーヴァントを靈体化させてください。それで離してあげましょう」

「・・・・・残念だけど、セイバーは靈体化出来ないの。だから、その要求は飲めないわ」

「戯れ言を・・・僕が聖杯戦争に無知だと思いましたか? そんなサー・ヴァントが居るわけが無い」

「嘘じゃないわよ!!」

「じゃあ、令呪を使えば良いでしょう。それなら靈体化出来るでしょ  
う」

「うつ、それは・・・」

凛は迷う。

ここでガンナーの提案を飲むべきなのは分かつていて。  
だが、令呪は三画しか無いのだ。  
こんなところで使いたくはなかつた。  
しかし、この状況は如何ともしがたい。  
なので――

「・・・・・分かつたわ」

結局、凛はその要求を飲むしか無かつた。